（大正五年四月六日第三種郵便物認可）昭和十二年十月廿五日印刷納本（毎月一回一日發行）

哲學研究

第二十二卷　第十一册

第二百六十號

昭和十二年十一月一日發行

種の論理の意味を明にす（承前）……………文學博士　田邊元

アリストテレスに於ける ousia としての psyche……………文學士　高橋亨

人格の問題……………文學士　横山巖
——ベルグソンに於ける二つの自我に就て——

相對性理論をめぐる認識論的諸問題……………文學士　近藤洋逸

京都帝國大學文學部內

京都哲學會

京都哲學會規則

第一條　本會ヲ京都哲學會ト稱ス
第二條　本會ハ廣義ニ於ケル哲學ノ研究及其普及ヲ以テ目的トス
第三條　本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ
一、每月一回研究會ヲ開ク
一、每年公開講演會ヲ開ク
一、每月一回哲學研究ヲ發行ス
第四條　本會事務所ヲ京都帝國大學文學部內ニ置ク
第五條　本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク
一、委員(若干名)京都帝國大學文學部哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ
一、書記(一名)委員會ニ於テ囑託ス
第六條　本會ノ趣旨ニ賛同スル者ハ何人ニテモ會員タルコトヲ得學校、圖書館、教育會、其他ノ團體ハ其團體ノ名ヲ以テ入會スルコトヲ得
第七條　會員ハ會費トシテ年四圓四拾錢、前後二期ニ分チテ前納スベキモノトス
第八條　會員ハ本會ノ諸種ノ會合ニ出席スルコトヲ得、且ツ雜誌『哲學研究』ノ配付ヲ受ク
第九條　本會規則ノ改正變更ハ委員會ノ決議ニ依ル

京都哲學會役員

委員

文學博士	天野貞祐
文學士	岩井勝二郎
文學博士	植田壽藏
文學士	臼井二尙
文學博士	小島祐馬
	木村素衞
文學博士	九鬼周造
文學博士	田邊元
文學士	中井正一
文學士	西谷啓治
文學博士	野上俊夫
文學博士	羽溪了諦
文學博士	波多野精一
文學士	服部英次郎
文學士	久松眞一
文學博士	本田義英
文學博士	山內得立

前號目次

美の深さ（承前）…………文學博士 植田壽藏

種の論理の意味を明にす…………文學博士 田邊元

プラトーンに於ける數學と形相論との關係（承前）…………オットー・トェプリッツ 長澤信壽譯

第九回萬國哲學會の印象…………文學士 澤瀉久敬

會告

一、本會ヘ入會希望者ハ京都市西洞院七條南內外出版印刷株式會社內京都哲學會宛テニ規定ノ會費（前表紙裏ニアリ）御納付ノ上御申込被下度候
一、會員ニシテ轉居入退會等（編輯事務以外ノ一切）ノ事務ハ內外出版印刷株式會社內京都哲學會ヘ御通知被下度候
一、會費ハ振替口座**大阪三〇六六三番**內外出版印刷株式會社內京都哲學會宛テニ御拂込被下度候
一、前金切レノ場合ハ帶封ニ「**前金切**」ノ印章押捺致スベキニ付直ニ御拂込下サレ度候
一、本誌ノ編輯ニ關スル通信及紹介・新刊書・寄贈雜誌等ハ凡テ本會宛テニ御發送被下度候

京都帝國大學文學部內　**京都哲學會**

註文規定

◇會員にあらざる購讀者の御註文及び廣告に關する件は**內外出版印刷株式會社**へ御申込下され度候
◇本誌の御註文はすべて代金郵稅共前金にて御送り下され度く候
◇振替貯金にて御送金の際は（**振替京都三九三一番大阪三九三一番東京三九三一番**）內外出版印刷株式會社宛に願上候
◇特に請求書及領收書等を要する場合は郵券參錢御添付下され度候

定價

册數	定價	郵稅
一册	金四拾錢	金壹錢
六册（前金）	金貳圓四拾錢	不申受
十二册（前金）	金四圓八拾錢	不申受

廣告料

一頁　金參拾圓　半頁ハ取扱不申

昭和十二年十月廿五日印刷納本
昭和十二年十一月一日發行　第二百六十號　第二十二卷第十一册

不許複製
禁轉載

編輯者　京都帝國大學文學部內　京都哲學會
右代表者　服部英次郎
發行者　須磨勘兵衞　京都市北小路通新町西入
印刷者　須磨勘兵衞　京都市北小路通新町西入
印刷所　內外出版印刷株式會社　京都市西洞院通七條南入

發行所　京都市下京區西洞院七條南　內外出版印刷株式會社
振替口座　京都三九三一番　大阪三九三一番　東京三九三一番

本社　京都市下京區西洞院通七條南入　內外出版印刷株式會社

賣捌所
（東京）寶文館　東京堂　東海堂
（大阪）北隆館　上田屋　寶文館　盛文館　參文社
（神戸）寶文館　川瀨書店
（京都）大文社　大盛社

田邊元博士監修

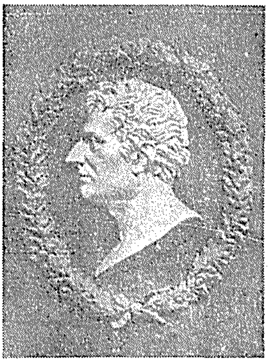
（西哲叢書第十六編）

京都帝國大學助教授 木村素衞著

フィヒテ

定價 壹圓參拾錢 送料 拾四錢

四六判二一五頁コロタイプ口繪一葉



今日歴史哲學的興味が著しく旺盛なのは何故だらうか。それは單に存在に對する具體的な認識が知的關心を引いてゐるためだけではない。生きた實踐に對する自覺が強く要求されてゐるからである。フィヒテの思索はその一生を貫いて常に實踐の問題の究明にその重心を有つて居た。獨りかゝる思索者であつたのみならず、彼はまた眞劍な實行家であつた。實踐の內から彼の哲學が生れ出で、彼の思想はまた實現に於て自己を吟味しつゝ成熟し結實した。著者はこの樣な彼の哲學の基礎構造を特に明確に刻み出し、同時に彼が深く尊敬したカント哲學との聯關を追究する事に依て兩者の繫がりを見極めようと努力した。實に本書こそは我が國に於ける最初のフィヒテ研究書として極めて高き學術價値を有するもの。日本でこれ以上ユニークなフィヒテ研究書の現れる事は當分不可能であらう。

〔目次〕

序
第一章 知識學の本質
第二章 第一根本命題の檢討
第三章 第二根本命題の檢討
第四章 第三根本命題の檢討
第五章 理論的自我と實踐的自我との體系的連關
第六章 カント哲學に對するフィヒテ哲學の問題史的連關

近刊

ホッブス 重松俊明著

ライプニッツ 下村寅太郎著

弘文堂

東京神田駿河臺・振替東京五三九〇九

京都田中西浦町・振替京都一三二五

（大正五年四月六日第三種郵便物認可）昭和十二年十月廿五日印刷納本（毎月一回一日發行）昭和十二年十一月一日發行 哲學研究 第二百六十號 定價金四拾錢 郵税金壹錢